四月十六日夜裏に、遥かに霍公鳥の喧くを聞きて、懐を述ぶる歌一首

三九八八番
ぬばたまの　月に向かひて　ほととぎす　鳴く音遥けし　里遠みかも

大目秦忌寸八千島の館にして、守大伴宿禰家持に餞する宴の歌二首

三九八九番
奈呉の海の　沖つ白波　しくしくに　思ほえむかも　立ち別れなば

三九九〇番
我が背子は　玉にもがもな　手に巻きて　見つつ行かむを　置きて行かば惜し